

自閉症スペクトラムの早期発見から適切な支援へ向けて

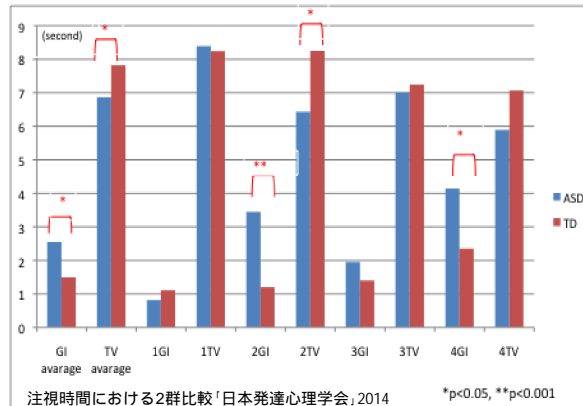
昭和大学提供
作成日 2016年2月10日
更新日

	研究者氏名 かない ちえこ 金井 智恵子	所属機関 昭和大学発達障害医療研究所	関連キーワード(複数可) 自閉症スペクトラム、視線計測、乳幼児期
	主な研究テーマ ・自閉症に関する研究	主な採択課題 ・若手研究(B)平成24～26年度(配分総額:4,550千円) 課題名「視線計測を用いた広汎性発達障害の早期診断システムの開発に関する研究」	

科研費による研究成果

- ・診断前のASD(自閉症スペクトラム)ハイリスク児の視線行動パターンを明らかにするために、視線計測を用いて検討した。
- ・対象は、乳幼児38名(ASDハイリスク児群12名、定型発達児群(TD)26名)であり、ASD群はASD家族歴あり、DQ70以上とした。評価ではM-CHATと新版K式発達検査というテストで実施した。両群で年齢・性別において有意差はなかった。
- ・刺激はビデオの刺激は50秒の長さで音声なし、4ビデオクリップから構成されており、画面片側に幾何学模様(GI)、残り片側画面には、人物動画(TV)が呈示される。
- ・結果はASDの方が、GIを好み、TDの方がTVを好む傾向が示された。

・ASD群では人の顔等ソーシャルな刺激に対して関心を示さない傾向がある。
ASDハイリスクを見極める重要な指標の可能性
がある。



当初予想していなかった意外な展開

- ・ASDハイリスク児を対象にして研究の準備を進めていたが、臨床面に着目すると、母親の育児に関する悩みも多くみられたため、母親も対象にして育児感情について検討した。その結果、TDの母親に比べて、ASDの母親の方が育児ストレスが高い傾向が示され、その中でも社会的孤立が高かった。
 「母親は子どもの発達に違和感を感じているけど…」
- ・* 周囲に相談する場所がほとんどないことが問題
- ・地域で子どもの発達に心配をもつ母親の社会的孤立を予防することが大切。
- 平成26年度より地域の親子グループを実施
- ・参加した保護者: 地域の情報交換ができたこと、育児の悩みを共有できたこと 育児不安の軽減
- ・参加した子ども: 母子分離ができたこと、他の大人や子どもと関わりを持てたこと 自立の一步
- ・今後も親子の地域支援が必要である。

今後期待される波及効果、社会への還元など

- ・ASDの早期マーカーとして生物学的指標が確立されることにより、ASD早期診断システムの構築作りが可能になるだけでなく、早期段階でそれぞれの子どもに適した支援や家族の支援につなげるための科学的エビデンスとして社会に貢献できる。